

姫路城(白鷺城, 出世城, 不戦の城)

(国宝, 国重要文化財, 国特別史跡, ユネスコ世界遺産, 百名城) (姫路市本町)

江戸時代初期に建てられた天守や櫓等の主要建築物が現存し、建築物は国宝や重要文化財、城跡は国の特別史跡に指定されている。この他に、ユネスコの世界遺産に登録や、日本100名城などに選定されている。

姫路城は、現在の姫路市街の北側にある姫山および鷺山を中心に築かれた平山城で、日本における近世城郭の代表的な遺構である。江戸時代以前に建設された天守が残っている現存12天守の一つで、ほぼ中堀以内の城域が特別史跡に、現存建築物の内、大天守・小天守・渡櫓等8棟が国宝に、74棟の各種建造物(櫓・渡櫓27棟、門15棟、塀32棟)が重要文化財に、それぞれ指定されている。1993年(平成5年)にはユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録された。この他、「国宝四城」や「三名城」、「三大平山城・三大連立式平山城」の一つにも数えられている。

姫路城の始まりは、1346年(南朝:正平元年、北朝:貞和2年)の赤松貞範による築城とする説が有力で、『姫路城史』や姫路市ではこの説を採っている。一方で赤松氏時代のものは砦や館のような小規模なもので、城郭に相当する規模の構築物としては戦国時代後期に西播磨地域で勢力を持っていた小寺氏¹の家臣、黒田重隆・職隆父子による築城を最初とする説もある。

戦国時代後期から安土桃山時代にかけて、黒田氏や羽柴氏が城代になると、山陽道上の交通の要衝・姫路に置かれた姫路城は本格的な城郭に拡張され、関ヶ原の戦いの後に城主となった池田輝政によって今日見られる大規模な城郭へとさらに拡張された。

江戸時代には姫路藩の藩庁となり、更に西国の外様大名監視のために西国探題が設置されたが、城主が幼少・病弱・無能な場合には牽制任務を果たせないために城主となる大名が頻繁に交替している。池田氏に始まり譜代大名の本多氏・榊原氏・酒井氏や親藩の松平氏が配属され、池田輝政から明治新政府による版籍奉還が行われた時の酒井忠邦まで約270年間、6氏31代(赤松氏から数えると約530年間、13氏48代)が城主を務めた。

明治時代には陸軍の兵営地となり、歩兵第10連隊が駐屯していた。この際に多くの建物が取り壊されたが、陸軍の中村重遠工兵大佐の働きかけによって大小天守群・櫓群などが名古屋城と共に国費によって保存される処置がとられた。

昭和に入り、太平洋戦争において姫路も2度の空襲被害があったものの、大天守最上階に落ちた焼夷弾が不発弾となる幸運もあり奇跡的に焼失を免れ、現在に至るまで大天守をはじめ多くの城郭建築の姿を残している。昭和の大修理を経て、姫路公園の中心として周辺一帯も含めた整備が進められ、祭りや行事の開催、市民や観光客の憩いの場になっているほか、戦国時代や江戸時代を舞台にした時代劇などの映像作品の撮影が行われることも多く、姫路市の観光・文化の中核となっている。

姫路城天守の置かれている「姫山」は古名を「日女路(ひめじ)の丘」と称した。『播磨国風土記』にも「日女道丘(ひめじおか)」の名が見られる。姫山は桜が多く咲いたことから「桜木山」、転じて「鷺山(さぎやま)」とも言った。天守のある丘が姫山、西の丸のある丘が鷺山とすることもある。

別名「白鷺城(はくろじょう)」の由来は以下のような説が挙げられている。

- 姫路城が「鷺山」に置かれているところから。
- 白漆喰で塗られた城壁の美しさから。
- ゴイサギなど白鷺と総称される鳥が多く住んでいたから。
- 黒い壁から「烏城(うじょう)」とも呼ばれる岡山城との対比から。

白鷺城は「はくろじょう」の他に「しらすぎじょう」とも読まれることがあり、村田英雄の歌曲に『白鷺（しらすぎ）の城』というものもあるが、日本の城郭の異称は音読みするのが普通である。しかし現在は、NHKの番組でも「しらすぎじょう」と紹介されることがあるため、一般的には「しらすぎじょう」と認識されていることが多いと思われる。姫路市内の白鷺中学校や白鷺小学校のように学校名に使用されたり、小中学校の校歌でも「白鷺城」または「白鷺」という言葉が使われている事が多い。戦前の尋常小学校で歌われていた『姫路市郷土唱歌』の歌詞にも「白鷺城」や「池田輝政（三左衛門）」などが使われている。他にも以下のような別名がある。

出世城

羽柴秀吉が居城し、その後の出世の拠点となったことから呼ばれる。

不戦の城

幕末に新政府軍に包囲されたり、第二次世界大戦で焼夷弾が天守に直撃したりしているものの、築城されてから一度も大規模な戦火にさらされることや甚大な被害を被ることがなかったことから。

1333年（元弘3年）、元弘の乱で護良親王の令旨を奉じて播磨国守護の赤松則村が挙兵し、上洛途中の姫山にあった称名寺を元に縄張りし、一族の小寺頼季に守備を命じた。南北朝の争乱で足利尊氏に呼応した則村が再度挙兵し、1346年（南朝：正平元年、北朝：貞和2年）、次男の赤松貞範が称名寺を麓に移し姫山に築城し姫山城とする。1349年（南朝：正平4年、北朝：貞和5年）、貞範が新たに庄山城を築城して本拠地を移すと、再び小寺頼季が城代になって以後は小寺氏代々が城代を務める。

1441年（嘉吉元年）、嘉吉の乱で赤松満祐・教康父子に対して山名宗全が挙兵、赤松父子は城山城で自害し赤松氏は断絶、赤松満祐に属していた城代の小寺職治は討死した。その後、山名氏が播磨国守護に、山名氏の家臣・太田垣主殿佐が城代になった。1458年（長祿2年）、長祿の変で後南朝から神爾を取り戻した功績で赤松政則（満祐の弟の孫）の時に赤松氏再興が許される。1467年（応仁元年）、応仁の乱で山名氏に対立する細川勝元方に与した政則が弱体化した山名氏から播磨国を取り戻し、当城に本丸・鶴見丸・亀居丸を築く。

1469年（文明元年）、則村が隣国の但馬国に本拠地がある山名氏に備えるため新たに築いた置塩城に本拠地を移し、小寺豊職が城代になる。1491年（延徳3年）、豊職の子・政隆が城代になり、御着城（姫路市御国野町御着）を築城開始。1519年（永正16年）、政隆が御着城に本拠地を移し、子の則職が城代になる。

1545年（天文14年）、則職が御着城に移り、家臣の黒田重隆に城を預ける。黒田重隆・職隆父子が主君で御着城主の小寺政職（則職の子）の許可を受けて、御着城の支城として1555年（天文24年）から1561年（永祿4年）の間に、現在よりも小規模ではあるが居館程度の規模であったものから姫山の地形を生かした中世城郭に拡張したと考えられている。姫路（姫山）に城があったと確認できる一次史料は、永祿4年の『正明寺文書』に「姫道御溝」の記述や『助太夫畠地売券』に城の構えがあるという記述で、これらを根拠に姫路城の始まりという説もある。職隆は百間長屋を建てて貧しい者や下級武士、職人、行商人などを住まわせるなどして、配下に組み入れたり情報収集の場所としていた。

1567年（永祿10年）、職隆の子・孝高が城代になる。1568年（永祿11年）、青山・土器山の戦いで赤松政秀軍の約3000に対して黒田軍（職隆・孝高父子）は約300という劣勢で姫路城から撃って出て赤松軍を撃退する。以後、1573年（天正元年）まで孝高（官兵衛・如水）が城代を務めた。

1576年（天正4年）、中国攻めを進める織田信長の命を受けて羽柴秀吉が播磨に進駐すると、播磨国内は織田氏につく勢力と中国地方の毛利氏を頼る勢力とで激しく対立、最終的には織田方が勝利し、毛利方についた小寺氏は没落した。ただし小寺氏の家臣でありつつも早くから秀吉によしみを通じていた黒田孝高はそのまま秀吉に仕えることとなった。1577年（天正5年）、孝高は二の丸に居を移し本丸を秀吉に譲る。

1580年（天正8年）、三木城・英賀城などが落城し播磨が平定されると孝高は秀吉に「本拠地として姫路城に居城すること」を進言し姫路城を献上、自らは市川を挟んで姫路城の南西に位置する国府山城（こうやまじょう）に移った。秀吉は、同年4月から翌年3月にかけて行った大改修により姫路城を姫山を中心とした近世城郭に改めるとともに、当時流行しつつあった石垣で城郭を囲い、さらに天守（3層と伝えられる）を建築し姫路城に改名する。あわせて城の南部に大規模な城下町を形成させ、姫路を播磨国の中心地となるように整備した。この際には姫路の北を走っていた山陽道を曲げ、城南の城下町を通るようにも改めている。同年10月28日、龍野町（たつのまち）に、諸公事役免除の制札を与える。この最初の条文において、「市日之事、如先規罷立事」とあることから、4月における英賀城落城の際に、姫路山下に招き入れ市場を建てさせた英賀の百姓や町人達が龍野町に移住したとする説がある。

1582年（天正10年）6月、秀吉は主君・信長を殺害した明智光秀を山崎の戦いで討ち果たし、一気に天下人の地位へ駆け上っていく。このため1583年（天正11年）には天下統一の拠点として築いた大坂城へ移動、姫路城には弟・豊臣秀長が入ったが1585年（天正13年）には大和郡山へと転封。替わって木下家定が入った。1601年（慶長6年）、木下家定は備中足守2万5,000石へ転封する。

1600年（慶長5年）、池田輝政が関ヶ原の戦いの戦功により三河吉田15万石から播磨52万石（播磨一国支配）で入城した。輝政は徳川家康から豊臣恩顧の大名の多い西国を牽制する命を受けて1601年（慶長6年）から8年掛けた大改修で広大な城郭を築いた。普請奉行は池田家家老の伊木長門守忠繁、大工棟梁は桜井源兵衛である。作業には在地の領民が駆り出され、築城に携わった人員は延べ4千万人 - 5千万人であろうと推定されている。また、姫路城の支城として播磨国内の明石城（船上城）・赤穂城・三木城・利神城・龍野城（鶏籠山城）・高砂城も整備された。

典型的な平山城で、天守のある姫山と西の丸のある鷲山を中心として、その周囲の地形を利用し城下町を内包した総構えを形成しており、堀は姫山の北東麓を起点にして左回りに城北東部の野里まで総延長約12.5kmある。内堀で囲んだ1周目は内曲輪、中堀で囲んだ2周目は中曲輪、外堀で囲んだ3周目は外曲輪といい、3重の螺旋を描くような曲輪構造で渦郭式縄張を形成している（内曲輪だけに注目すると階郭式）。

- ・ 内堀 - 長さ約3km、堀幅12-34m
- ・ 中堀 - 長さ約4.3km、堀幅約20m
- ・ 外堀 - 長さ約5.2km、堀幅約14m

各曲輪を仕切る門が以下の通り置かれた。

- ・ 内曲輪 - 八頭門・桜門・絵図門（出丸内側に菊門）・喜斎門・北勢隠門・南勢隠門
- ・ 中曲輪 - 市ノ橋門・車門・埋門・鵬門（くまたかもん）・中ノ門・総社門・鳥居先門・内京口門・久長門・野里門・清水門
- ・ 外曲輪 - 備前門（または備前口門・福中門）・飾磨津門（または飾磨門・飾万門）・北条門・外京口門・竹ノ門

大まかには、内曲輪は天守・櫓・御殿など城の中核、中曲輪は武家屋敷などの武家地、外曲輪は町人地や寺町などの城下町が置かれた。これらの多くが城郭の内にあり、江戸時代には日本では珍しい城郭都市を構成していた。このような総構えは他に江戸城や小田原城などにおける例がある。明治維新以後の陸軍設置や近代化で堀の埋め立てや建造物の破壊が行われたが、中曲輪・外曲輪は堀と石垣の一部が残っているほか、国道372号に竹の門交差点、野里街道沿いに野里門郵便局といった形で門の名前が残っている。外曲輪の南側は山陽本線姫路駅付近にまで達している。1888年（明治21年）に外曲輪の外堀南側に姫路駅が作られ、そこを通る形で山陽鉄道（山陽本線の前身）が敷設された。

内曲輪以内の面積は23ヘクタール（230,000m²）、外曲輪以内の面積は233ヘクタール（2,330,000m²）となっている。現在では内曲輪の範囲が姫路城の範囲として認識されている。

輝政による築城はちょうど関ヶ原の戦いと大坂の役の間であり、ゆえに極めて実戦本位の縄張となっている。同時に優美さと豪壮さを兼ね備えた威容は、「西国将軍」輝政の威を示すものでもある。姫路城以降は慶長20年（1615年）の江戸幕府による一国一城令（同年閏6月13日）や武家諸法度（同年7月）によって幕府の許可なく新たな築城や城の改修・補修ができなくなったこともあり、一大名のもので姫路城に続くほどの規模の城は建築されていない。

Wikipediaによる

